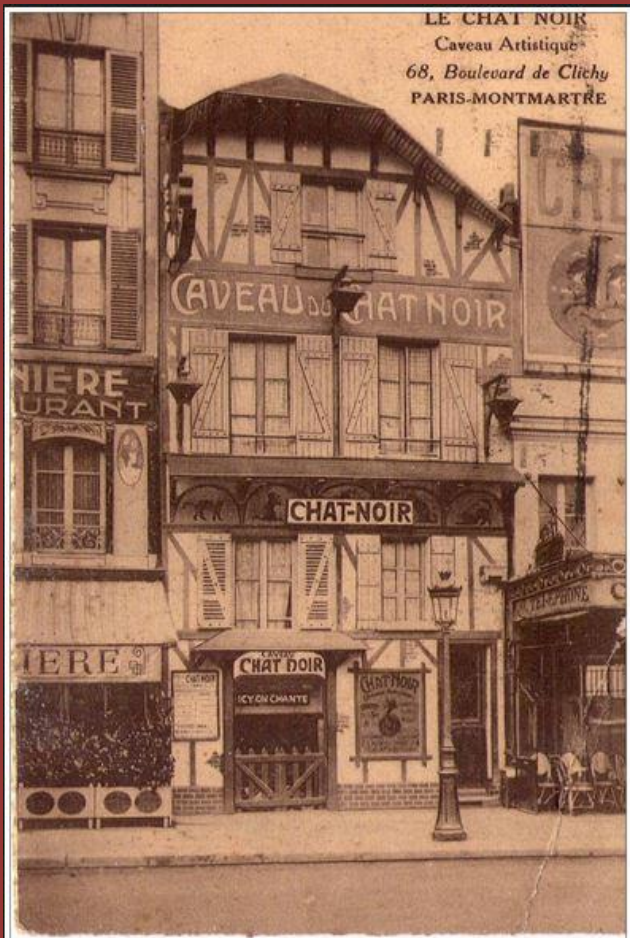


## 覗いてみて

マインツの歴史的な建物プロビアント・マガジン訪れると驚くかもしれない。僕は埃くさい古文書館とはまるで違う。若いのにクラシック、とも言えるかな。1000m<sup>2</sup>以上に及ぶ、ほとんど博物館なみの優雅さをお見せする。もちろんあなたのために。大事な仕事だもの。公の文化関心のためのね。あらゆるジャンルをそろえてる。独特の芸術のだ。僕を構想した人は、まずドイツ語風刺資料センターと登録した。そして1961年にマインツ来たらずぐに、誇りをもって僕をドイツカバレット資料館と名付けたんだ。

館員は世界中の風刺に関する姿・形に携わっている。だからそれ以来海外からのお客様がよく来る。こないだはモスクワから学生が1920年代の資料を博士論文のために探しに来た。日本の大学教授女史は亡命中のカバレットについて関心を持っていたよ。エール大学生は9か月間資料館の奥にこもって、中世の政治的ソングライターのルーツを探っていた。世界各国からよくくる要望が僕の宝物の重要さを示している。だから21世紀の開館以来、160以上もの展示会ができた。ヨーロッパの7か国で。例えばフランスでシテ・パリ国際大学のメゾン・ハインリッヒ・ハイネで「世界、カバレット! ドイツ・フランスでのカバレット資料館開館において」。これにモンペリエ、トゥールーズ、リヨン、ディジョンが続いた。ドイツ語圏では「カバレットの100年、AアルツィーからZチューリッヒまで」の展示でいろいろ出向いたよ。展示では一つのジャンルとしてのカバレットそのものについて、その形態、そして歴史が見られたんだ。もちろんカバレティスト人そのものが中心になっていた。特にデモクラシーと自由を目標に掲げた政治・文化的カバレット芸術のね。その構想芸人が大事なんだ。そして彼らの人生。労苦も多かった人生だ。そしてカバレットが、観客にとってもっていた意味について、すべての時代を通して展示された。まず皇帝時代のベル・エポック時の観客にとって。新時代の到来と検閲。第一次と第二次世界大戦の間。民主主義と独裁政権、軍国主義とファシズム。人々の生き残るための術が関心ごとだったのだ。内心と現実上での亡命。流儀の間と椅子の間隔。私たちの文化そのものが扱われた。そしてその変化。創造。そしてもちろん笑いが中心だった。今日も過去も。自分自身と他人について笑うこと。時代の変化の中での嘲笑の地形図とその言葉。ユーモアやあまりにも人間らしい詩芸術と同様に。馬鹿げたことと具体的なことについて。芸術的な形での現代批判。そしてとりわけ娯楽。はじめからそうだった。愛だって入っていた。ところで収集も愛だ、とアメリカ人哲学者ジョージ・スタイナーは言っていた。



カバレットを形取っている、いろんな舞台芸術のミックス形式は19世紀終わりごろからはじまった。この形式はフランス語のきれいな言葉「キャバレ」で象徴された。キャバレにはまず居酒屋バーの意味合いがあり、プライベートさを物語っていた。それからいろんな前菜が飾ってもらえた大皿オードブルが意味されていた。皿がたくさんの舞台芸術、音楽、劇場、暗唱、ダンス、スケッチ、そして絵画でもって飾られている、ということ。まず何人かの前駆者、例えば手回しオルガンを弾いて殺人犯について歌った「暗殺者のキャバレ」がいた。そして1881年秋の夜、元画家のロドルフ・サリがモンマルトルにある自分の居酒屋、シャノアールで、裕福な観客を前に箱にあがって芸人を紹介していったことが、この言葉のきっかけになった。世界中が現代批判的・文学的な芸として今日までしている、カバレットの誕生だった。

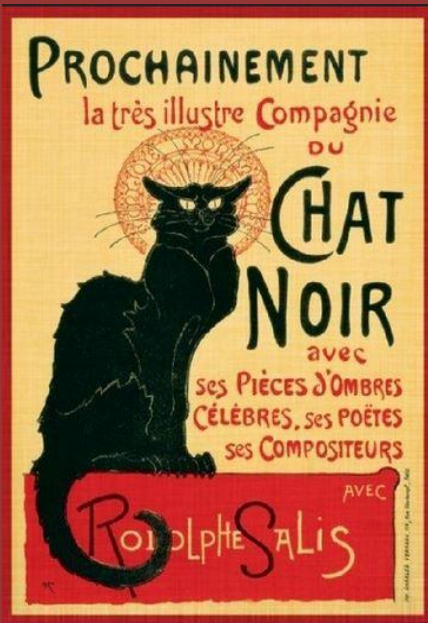
いわゆるキャバレ芸道の父は芸人紹介司会者サリだ。オードブル皿の前菜を中心でまとめるドレッシングみたいだった。彼の芸人ショーは悪名高かった。侮辱もあり、暴力っぽく、シャンソンも演奏した。そういうところがパリの知的層を魅了した。まもなく文学エリートたち「ブットサークル」（聖なるマウンド）が乗り出した。それに政治家、王侯貴族が続いた。たとえばビクトル・ユーゴーとエミール・ゾラ。イタリアの自由活動者ジュゼッペ・ガリバルディが、ジェローム・ボナパルト王子、ナポレオン皇帝の甥、ナポレオン3世の甥と同様に来た。多数の素晴らしい才能を持つ歌手、作曲家、話し手が舞台に立った。フランスキャ

バレの先代の大型芸人アリストイド・ブルワンやイヴェット・ジルベールなど、ほとんどがのちに有名になった芸術家たちだ。彼女の男性パートナー、アリストイドは彼の居酒屋ミルリトンで、ブルジョアの二重のモラルに対する社会批判的なシャンソンを歌い、名声をあげた。アンリ・ド・トゥールーズ・ロートレックのポスターで今でも有名だ。最近資料館に1895年のシャノアールの2枚のポスターも、他の全20世紀の二万枚近いポスター同様に収められた。収集は国民の一部の芸術と文化へのおおきな愛着で始まった。少なくとも特別な階層ボヘミアンにとってのカバレットも同様だった。作家オットー＝ユリウス・ビアバウムは以下のように伝播した。

「すべてのアートと余興人生のルネッサンスが到来。新カルチャーを踊りこけるぞ。舞台上超人を産み落とす。こんな社会はふっとばせ」これが真剣にいわれたのだ。残念なことに全く違

う人たちが世界をふっとばしたけれど。でも1900年前後は少なくとも新しいことが起きていたんだ。新世代の到来で、勃発気分溢れていた。この時代に産み落とされていた人。キャバレとしての世界。アールヌーボーのようにこの新しい芸術形態は、本格的な運動になりトレンドで、大波になってドイツ帝国まで押し寄せてきた。保守的バロン貴族のエルンスト・フォン・ボルツォーゲンがドイツで、1901年1月18日帝国設立30周年の日に「お舞台の上」で成功を収めた。興行のホール規則が資料館に収集されている。

ミュンヘンでももなく「11人の死刑執行人」という、初のほんとの政治カバレティストが活動しだした。フランク・ベーデキントが、パリからきたマルク・アンリ同様に、そ



の11人と一緒に活躍した。こうしてカバレットの母方祖先はフランスから、父方はドイツから来ることになった。昔の貴族みたいにヨーロッパ中が紡ぎあった。そしてカバレットは次から次へと興行された。1901年にはもう、ベルリンのシュプレー川沿いだけで、カバレット



文学的なショーを見せる酒場が40もならんだ。ウィーンには「やさしいアウグスティンへ」「夜のあかり」「こうもり」が開店した。アウグスト・シュトリントベルクとの間に第一子を、フランク・ベーデキントとの間に第二子をもったフリーダ・シュトリントベルクはロンドンに最初のカバレット店を開いた。バルセロナではすでに「4匹の猫」ができていた。クラクフ、ワルシャワ、ブダペスト、サンクトペテルブルク、モスクワにもフランスとドイツ帝国のカバレット場をモデルにした店ができていった。でも商売上のノウハウと、幸運をよぶ手際のない店はすぐにつぶれてしまった。カバレットの人気はでも、少なくともはじめは、続いていった。以前パリでもそうだったように、いわゆる「余興放浪人」による居酒屋での小舞台が、新しいアート様式の特徴になった。居酒屋小舞台がボヘミアン芸人の夢を現実にしたのだ。芸人は自由に、既形の芸術とは無関係に独作を発表した。この芸の舞台では、直接さに魅了される。劇だと何かを「演じ」るけれど、

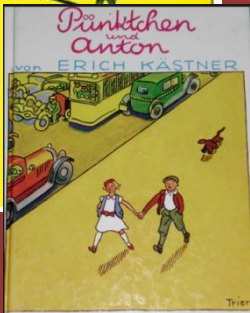
カバレットは観客に直接語ってくる。芸人には滅多にギャラはなかった。支払いは飲食物で済まされた。あるいは観客から献金が集められた。ところで放浪人の詩吟だ。その手本やルーツは中世まで深くさかのぼる。モラル風刺的な詩、いわゆる「大詩人」の愛と酒宴の唄がそうだ。ハンス＝ディーター・フュッシュの「新はこぶね」では1冊目のプログラム誌ですぐに、12世紀の「アルヒポエタ」が功績を唄とともに認められた。すごく意義のある、約300に及ぶ唄の収集で1803年にベネディクトボイレン聖堂院で発見され、ボイレンの唄と名付けられた。これはカルミナブラーナの新曲とともに世界の名声を得た。放浪人の、豪華極まりないオラトリオとしての詩吟だ。カール・オルフの素晴らしい作曲で時代を超えたものとなった。

それに対して、時代と結びついた現象は芸人ボヘミアン自体だった。新しい小芸術舞台は、一瞬によって一瞬のために生きていた。長期間成功を収めたのはミュンヘンのジンプリシズムぐらいだ。なかなかの司会者で、才能豊かな実業家女性カティ・コブスに同伴されて、芸術と商業の共生はジンプリシズムで成功した。1903年から1968年までの56年もの長期間ジンプルは続いた。この年月は今日まで、少数のドイツのカバレット劇場しか到達していない。そして一体、誰が第一次世界大戦までジンプルに出入りしていたんだろう。神と世界とミュンヘンの上層階級だ。海外からの客、ウェールズの王子、ブルガリアのフェルディナンド皇帝、ベルギー国王、産業界の社長、現金貴族たち。「ケーペニツクの大尉」で有名になった靴職人ウィルヘルム・フォイクトはギャラをもらってジンプルに立ち、自分のサインを売っていた。そしてハンス・ポッティチャーという男。はじめは常連客だったのが、劇場作家になって、のちヨアヒム・リングルナッツとして有名になった。



資料館収集50年を記念して、僕にとっても親切な高齢のマダムが「地下墓地の金の本」を譲ってくれた。長くこの世を去った夫ティボー・カジクスとウェルナー・フィンクが1929年ベルリンでこのカバレットを始めた。この素晴らしいプレゼントにはヨアヒム・リングルナッツ

の冗談にみちた言葉やワルター・トリアーのオリジナル画が入っている。エリッヒ・ケストナーの本のイラストだ。そしてハンス・アルバースからカール・ツックマイヤー、クラウスとハインリッヒ・マン、ワルター・ハーゼンクレバー、ゲオルゲ・グロツ、マックス・ラインハルト、エリッヒ・ミュゼム、グスタフ・グリュントゲン、ルイジ・ピランデロ、エルウィン・ピカートル、アルフレッド・ド布林とリヒャルト・ヒュルゼンベック等のサインと言葉がおさまっている。



ト・ブ  
ア・ワ  
に歌わ

歌曲様式のひとつ)やフリードリッヒ・ホーレンダーとルドルフ・ネルソンのシャンソンでカバレットは特にベルリンの大ホールやバラエティー劇場で喝采をえた。ミュンヘンではカール・バレンティンが国民的馬鹿さかげんで、根なしで悲しいお笑い芸人を演じた。1932年ヒトラーが独裁政権をとった1年前に、ウェルナー・フィンクは舞台上で観客をみながら困ったように微笑んだ。もしナチスが政権の座についたらどんなことになるかを想像して、以下の予言をした。「第三帝国建立の初めの週にパレードが開催される。もしパレードが雨、雪、あられで妨害されることになったら、周辺のユダヤ人は皆、銃殺される。」これは、間もなく明らかになったが「隠されたポイント」ではなかった。

ナチスが政権の座についたとき、フィンクは冗談を反抗行動の手段にした。何百人のカバレティストと風刺家たちがこのナチス千年帝国を強制収容所で過ごした。例を挙げるとエリッヒ・ミュゼム、フリッツ・グリュンバウム、クルト・ゲロンで、マインツで僕の目の前のロマーノ・グアルディーニ広場に風刺の星で記念されている。それぞれオラーニエンブルク、ダハウとアウシュビッツの強制収容所で殺害されたカバレティストだ。

1945年5月8日後に、本当のカバレットルネッサンスが始まった。「トリゾネジアン」では反抗的で憂鬱に「わーい、俺たちやまだ生きてるぞ」と歌った。デュッセルドルフの「小筆筒コモートヒェン」でのカバレットは政治文学的な基準をかえた。エリッヒ・ケストナーはミュンヘンで再び執筆をはじめ、ギュンター・ノイマンの「島民」はリアス・ラジオ放送局でカバレットを冷たい戦争のベルリンに届けた。ポルフガング・ノイスは大戦についてのドイツ人の故意の忘却の結果と、経済的に奇跡の年月を西ドイツ人の意識に、調子を合わせるようにばんばん植え付け、「ミュンヘン笑撃協会」(Münchner Lach- und Schießgesellschaft)とベルリンの「ハリモグラ」同様、テレビ向けの舞台上で大晦日を賑わせた。こうしてカバレットは国民の広い観客を対象するようになっていった。当時政治カバレットはテレビで大きくなった。それに対し東ドイツ



のカバレットは 40 年以上、実際にあった検閲の枠内に多かれ少なかれ、簡単に収まっていた。結局は社会主義のいい面に満足していた。これについては単独の章で扱われるべきで、現在東ドイツのカバレット史の収集とドキュメンタリーは、ザール川ほとりのベルンブルク城内で独自に行われている。

西ドイツでのカバレットはフランツ＝ヨーゼフ・デーゲンハルトが 60 年代に、ネオナチの台頭に対して歌ったり、市民運動が盛んだった 70 年代を APO（国会外反内閣派グループ）と一緒に活動しまわった。ハンス＝ディーター・フュシュの「ハーゲンブーフ」とともに最後には、皆もすべても病気で気が狂ってる、と太鼓判をおした。

80 年代には「三つの竜巻」が、若い自発的集団とオルタナティブ派が出没する中を荒れまわった。現実風刺「我らのくにの中」のトーマス・フライタークがコール首相を何度もパロディ化し、ゲルハルト・ポルトと一緒に国民のメンタリティーの根にメスをいれて分析した。リヒャルト・ローグラールとともに国民の、精神的モラル的に変化した自由志向を皮肉でかわし、台頭



し出したテレビの私放送局にも出るようになった。それ以来カバレットとコメディの境がはっきりしなくなった。政治的メッセージの活動と金儲け主義、または芸術的舞台と巨大アリーナとの境界。かつてカバレットはその武器「冗談、風刺、皮肉、深い意味」でこういった関係を打破しようとしていたのが、100 年後には自身が娯楽産業の一部になってしまった。国は変わった。パラダイム変化も言わずもがな。でもそんなことは、歴史ではよくあることだ。基本法でさえ、矛盾でいっぱいだ。すべてに出発点、その経過と新しいものへの移行がある。そして



いつか、その文化の歴史になる。そのカバレット史はこのぼくが記録している。だから・・・きてみてね。覗いてみてよ。暇をとって。いつか会おうね！

あなたのドイツカバレット資料館